随想 第186回

アジアとヨーロッパ
―建国記念の日に想う―

土岐市長　塚本保夫

2月11日は「建国記念の日」であり、伝承によれば神武天皇即位以来の紀元2667年であります。

神武天皇即位より百有余年にして、インドで釈迦牟尼が生誕され、菩提樹下で悟りを得て、仏教が生まれたのと時を同じくし、中国では、孔子が活躍され、その教えにより儒教が生まれました。

これにより、東洋思想の基盤が出来上がった訳でありまして、2500有余年前という時代は、注目すべき素晴らしい時代であったと、あらためて敬服する次第であります。

その後、約500年後にキリスト教が生まれ、さらに600年ほどしてイスラム教が生まれ、今日まで連綿として続いております。

ところで、東洋・西洋という概念があり、アジアとヨーロッパと呼称しております。

アジアとかヨーロッパとは、どういう意味を持っているのか、その語源を調べてみますと、なるほどと納得できるものがあります。

つまり、アジアとは、アッシリア（紀元前18世紀から前7世紀にかけて、チグリス川上流域に栄えた王国）の碑文にあるasu（日、出ずる地）が転訛してassiaになり、それがギリシャに伝わって、Europa（日、没する地）に対するAsiaになったといわれております。

要するに、アジアは「陽の昇る場所・東」であり、ヨーロッパは「陽の沈む場所・西」ということになるのであります。

しかし、古くギリシャ人からローマ人に語り継がれたころには、東方といえば、せいぜい、強国ペルシャやヘレニズム（東方文化と融合し、普遍的性格を持つようになったギリシャ文明）諸国のシリアやエジプトまでが、意識されていたものといわれます。

時は下って、13世紀から14世紀にかけて、ヴェネツィア共和国の商人であり、旅行家でもあったマルコ・ポーロが、中国の元朝の首都・大都（北京）を訪れ、皇帝フビライに仕え、モンゴル帝国内を旅行し、その体験を「東方見聞録」に著しました。この書物は、ヨーロッパ人に東アジアに対する関心を高め、後の大航海時代に大きな影響を与えるとともに、中世におけるアジア観を一変させたといわれ、世界史の転換点となりました。

また、東方見聞録には、日本のことを「黄金の国ジパング」と紹介されており、これは、奥州藤原氏が対中国交易を行っていたことから、平泉・中尊寺の金色堂のうわさを聞いて、想像し書いたのではないかといわれております。

これにより、ファー・イースト（極東）といわれる東の果ての日本に、神秘的な魅力と関心を持ったのではないでしょうか。

こう考えてまいりますと、まさにわが国は「日、出ずる国・日本」であり、白地に真っ赤な太陽の輝く日章旗ほど、日本を象徴するシンボルはほかになく、そのデザインの簡素で清潔感溢れる感覚は、日本人の誇りであると「建国記念の日」に想うこと頻りであります。

さて、最近アジアの経済成長が世界的に注目されております。

特に、日本・韓国・台湾・シンガポール・マレーシアなどの先行諸国を追い越す勢いで、中国・インド・ベトナムなどが、急成長を遂げつつあり、4大文明に数えられる古代インドのインダス文明と、古代中国の黄河文明の興隆を髣髴させるように、世界的にアジアが、再認される時代がやって来たように感じます。

天然資源の少ない日本は、人こそ最大の資源であり、科学技術創造立国とか、知的財産権立国が、国是とされておりますことにかんがみ、この地域が、人類永遠の福祉と繁栄の重要な研究拠点として、大きな役割を果たせるよう願ってやみません。

人類永遠の幸福の為に、みんなの力を合わせようではありませんか。